

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2005.12）6巻1号:55～59.

JICA集団「母子保健人材育成」コース研修—職員との交流が深まった
Welcome Party—

杉山さちよ、山内まゆみ、一條明美、苫米地真弓、留畑寿
美江、中島宣昭、菅野予史季、河村奈美子、神成陽子、竹
明美



(写真① Party会場：鯉のぼり)



(写真② 小物展示)



(写真③ Party会場：七夕祭り)



(写真④ Party会場：雛人形)



(写真⑤ お茶をたてている場面)



(写真⑥ 研修員はじめてのお茶席)

ました。この点については今回心配しましたが、苦いなりに楽しんでいただけたようでした(写真⑤、⑥)。また、日本文化のひとつとして遊び文化である剣玉を紹介したのですが、これを大変気に入った研修員がおり、後に「この遊びは集中力・バランス感覚・運動神経・物理学的側面を有した奥深い遊び道具だと思った」との感想を頂き、もしかすると何年か後にタンザニアあたりで剣玉に興じる子供たちに出会うことになるかもしれません。最後は七夕企画として研修に臨む決意や日頃の願いを短冊にしたためて頂き、関係者全員で無事研修が終了することを祈願して三三七拍子で締めくくり Welcome Party を終了しました。

研修員の感想からは、「日本人の宗教観やそれぞれの季節に対する思いが上手く表れた展示で、大変気に入った」(エジプト)、「日本人が、それぞれの伝統文化を大切にしているのが良く理解できた。また、毎月の行事や風物詩があるのは素敵である」(タンザニア)、「一番気に入ったのは、お茶でのおもてなし。お手前をしてくださった学生さんの手の動きがひとつひとつ優雅で美しく、魅了された。自分も習ってみたい」(モンゴル)、「古くからの伝統や観念を、若い世代が守っている様子が印象深く、素晴らしいと思った」(グルジア) などでした。以上、研修員からの感想を抜粋して記載しましたが、準備をしながら日本文化って奥が深いと改めて感じるスタッフでした。

3. 17年度 Welcome Party 準備・当日、研修員の感想

研修員は、アフガニスタン、バングラディシュ、ベリーズ、ボリビア、グアテマラ、モロッコ、ネパール、パプアニューギニアからの11名(全員女性)でした。

企画にあたっては、前年度の良いところを引き継ぎ、くつろげる空間と職員と研修員との交流を十分に深めようという意図を大切にしました。Party 参加者への呼びかけは「Welcome Party の開催について」の案内文を当学科職員はもとより学長、副学長、病院長、看護部、総務課研修企画係などに配布しました。学生には Party の参加とともに協力を求め、茶道部、空手部が Party を盛り上げる役割を担ってもらいました。遠く海外からの研修員を心から歓迎してくれる人たちが多ければ多い程、研修員は喜ぶだろうとの考えからだけでなく、私たち職員もくつろげ、楽しんで交流の

輪を広げる機会になることを願い積極的に Party への参加を呼びかけました。

Party 会場は、地域看護学実習室とし和室には、前年度同様に助手の一人が実家から運んでくれた由緒ある雛人形を幼少期の思い出に浸りながら飾り付け、研修員の目を楽しませることができました。段飾りの雛人形は研修員が研修の合間にいつでも鑑賞したり、リラックスできるように配慮し研修期間もそのままにしておきました。料理や飲み物は、研修員のお国柄を考慮し豚肉、牛肉、鳥肉などの肉類を控え魚介類や野菜、果物を多めにし彩りが鮮やかな食品を中心にしたメニューにしました。和食の代表的な天ぷらも魚介を中心にするなど工夫しました。また、日本の季節感を味わっていただけるようデザートには、スイカや苺などを添えました。食べること、飲むことは Party の最も楽しみの1つであることから、参加者全員が満足できる味つけ、満足できる量にも心を配りました。また、味覚だけではなく、テーブルクロスの色は赤や緑、黄色を取り入れた明るめで落ち着いたものを選び、持ち寄った一輪ざしの花瓶や小皿にガーベラ、カーネーション、ひまわり、かすみ草などの可愛い花を飾り、視覚的にも和やかな雰囲気にして美味しく料理を味わっていただけるよう気配りをしました(写真⑦)。

Party 当日は、研修初日で夕方5時半より約90分の予定で催され助手は看護学科4学年の実習指導を終えた後、あわただしく会場に集合しそれぞれの役割につきました。

参加者は前年度同様50名を超え大盛況でした。当学科職員は昨年と同様、浴衣をきて夏の季節感をかもしました。また、親睦をより深めるため、受付の際、研修員、参加者全員にネームカードをつけていただきました。ネームカードは桜や富士山をデザインしたものを使用しました。

開始に当たり研修員全員の母国が一目でわかるように大きな世界地図をホワイトボードに貼り、手づくりのそれぞれの国旗を小さめにマグネットで示せるように準備し、研修員の自己紹介と同時に各国の位置を地図に貼りつけていただきました。この場面を通して、研修員ならびに参加者は「小さな国の日本に来た」「本当に遠くからきている」「国を代表して来ている方々だ」などと実感したようです(写真⑧)。

つぎに、学生茶道部、空手部有志の協力のもとで‘お



(写真⑦ テーブルセッティング)



(写真⑧ 研修員自己紹介)



(写真⑨ 学生空手部有志“型”披露)



(写真⑩ 研修員と子供達のふれあい)

茶席’空手の型’を披露し日本文化を堪能して頂きました(写真⑨)。学生3人(全員女性)のスピーディでメリハリのある空手は格好よく、研修員は目を丸くして見ており、職員も学生の意外な一面に触れることができ感動しました。また、冬に食すものとしてお汁粉と甘酒を振る舞いました。研修員は甘すぎる味が苦手であることを予め知っていたので、甘さ控えめで調理しましたが、ベリーズの研修員は「私、日本のお汁粉を以前に食べたことがあります、とても大好きです」といいながら、お代わりをしていました。当学科職員の子供も6人参加していたため、会場にはチャイルドスペースを準備しましたが、研修員次々に自らチャイルドスペースにやってきて子供達を抱っこし「本当に子供はどこの国の子供も可愛くて美しい」(ベリーズ、アフガニスタン)と頬ずりしながら話しをしていました(写真⑩)。

Partyの最後には、看護学科職員から研修員一人一人に旭川の暑さを凌ぎ、小物やお弁当などを手軽に持ち歩いていただきたいという思いから扇子と小さな巾着袋をプレゼントしました。

研修員の感想には、代表者から「このように歓迎を受けてとても幸せです。このPartyのお陰で緊張感が一気にほぐれました。本当にありがとうございます。お茶は初めての体験でしたが楽しかったです。これからの研修頑張り、有意義なものにしていきたいです」(ベリーズ)とありました。「パーティは楽しかった。」(アフガニスタン)、「和やかで、子供達もいてほっとした」(バングラディッシュ)という感想が聞かれました。扇子や巾着袋は研修期間中持ち歩いてくれており、「とても助かっている」(モロッコ、ネパール、パプアニューギニア)との声が聞かれていました。また、エレベーターの中で茶道部、空手部の学生に気軽に話しかけている様子を見かけました。看護学科という組織に対する緊張感がほぐれ気軽に話しかけられる人たちという印象を与えたようでした。

4. Welcome Party を終えて

Welcome Partyの準備をしている最中はあわただしく夢中でしたが、振り返ってみますと私たちは「遠く海外からの研修員の皆さんを心を込めて歓迎したい」「研修員はじめ皆さんが楽しく、ほっと一息つきくつろげる空間をつくりたい」「お互いに交流を深められる機会にしたい」「旭川の土地に親しみを感じられるように」「日本の文化や季節感に少しでも触れられるように」「これからの研修が無事、有意義であるように」という思いをこめて企画し運営してきました。職員と研修員は様々なコミュニケーション手段を通して交流が深められ、その後の6週間に及ぶ研修期間にお互いに気軽に会話ができていたように思われました。会場の飾り付けなど準備、運営を通し日本文化の奥の深さを改めて感じる機会になったと同時に、看護活動はチームワークが重要ですが、看護学科助手同様のチームワークの良さを実感していただけたことと思います。

最後に、会費制のこの会に学長はじめ副学長、事務局長、企画総務課長補佐、研修協力係様からご芳志を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。また、ご協力いただきました関係者の皆様、学生有志の皆様へ深く感謝いたします。